家族がいるから元気でいられます

人生八十年の時代を迎えました。普通に働く人は、退職後二十年間の「第二の人生」を歩むことになります。その「第二の人生」を充実したものにするのは、難しいことではありません。本人のやる気と、それを理解し、支える家族がいればいいのです。

お年寄りが子・孫をかわいがるのと同様に、祖父母を見守る家族。「敬老の心」は、そんなものではないでしょうか。

今回は、今年金婚式を迎え、三世代が同居している、川口の田中康彦・春榮夫妻にお会いしてきました。

田中さん一家（写真左より）
恵子さん（嫁）仁之さん（長男）
一司くん（孫）、康彦・春榮夫妻

子どもや孫と旅行したのが一番の思い出です

――この十二月で金婚式を迎えられますが、ご家族との思い出などお聞かせください。

康彦　孫が全部で十人いるのですが、まだ孫が小さい頃、年に一度は子ども夫婦全員と一泊旅行に行ってました。

春榮　幹事を子ども夫婦が持ち回りにして、孫ともども総勢二十人であちこちの温泉などに行っていたんです。孫が大きくなってからはなくなってしまいましたが、本当に楽しい思い出です。

康彦　全員が揃ったあの頃が、一番楽しかったような気がします。

戦争中は子どもを守るのに必死でした

――では、今までで一番つらい苦しい思い出はありますか。

春榮　家族のいる最近ではありませんが、戦時中は、いろいろありました。

康彦　戦前は東京に住んでいました。仕事の関係で出張が多く、よく家を明けていましたから、子どもを二人かかえて、家内は大変だったと思います。

春榮　子どもの手を引いて、三人で郊外の農家へ、食糧の買出しに行ったときは大変でした。一日かかって大根三本とか、ネギ一束を買ってくるのです。

康彦　それでも買えればいいほうです。

春榮　主人がいないので、私が子どもを守らなければと必死でした。空襲の時は、焼夷弾を避けながら、子ども二人を物かげに伏せさせて、その上からおおいかぶさるようにして隠れたこともありました。

康彦　私は出張で、行きに通った町が、帰りには焼けていたことがよくありました。大阪も広島もそうです。私自身は運がよかった。

春榮　今は、家族が揃って生活できますから幸せです。

元気でいる秘けつは人生を楽しむこと

――とてもお元気でいらっしゃいますが、何か秘けつがありますか？

康彦　これと言ってありませんが、しいて言うなら、家族といることと、人生を楽しむことでしょうか。

――人生を楽しむとは、例えば趣味とか…？

康彦　趣味というほどのものではないのですが、旅行に行って写真を撮るのが好きです。二十年ほど前の退職する頃から、家内とあちこちに出かけています。

田中春榮さん（73歳）

春榮　一年に二～三回行きますので、国内はほとんど巡ったようです。

康彦　この八月には、孫二人を連れてハワイへ行ってきました。

8月に行ったハワイ（カウアイ島）にて
孫の田中奈緒子さん・中塚ひな子さんと

オアフ島、マウイ島、カウアイ島を巡り、一日は孫の希望で浜辺で寝てました。次はオーストラリアに行こうと思っています。

春榮　ハワイへ二人孫を連れて行ったものですから、ほかの孫から次の海外旅行の予約が入ってしまいました。

康彦　こんなことならハワイでなくて、香港くらいにしておけばよかった……。（笑）

カメラに夢中で海に落ちたことも

――もう一度行ってみたいとか、印象に残っているところはありますか。

春榮　九州なら、また行ってもいいわね。

康彦　いろいろあるけど、沖縄はよかったね。

春榮　そう言えば、広島の宮島へ行ったとき、主人が海に落ちたんです。

田中康彦さん（75歳）

康彦　上げ潮を夢中になって写真に撮っていたら、ファインダーをのぞいたまま、ドボン。

春榮　あれ以来、心配なので、旅行には必ずついて行くことにしています。（笑）

好きなことができて家族に感謝してます

――普段はどうして過ごしていますか。

康彦　私は小説が好きで、本を読んでいます。純文学はあまり読まなくなりましたが、SFや推理小説まで何でも読みます。特に本翻ものが好きで、市立図書館にあるものはほとんど読みました。

春榮　夢中になる性格ですから、家族揃っての食事の後、夜中の一時くらいまで読んでるんですよ。おかげで、朝は九時か十時ですけど…。（笑）

康彦　少し前までは、一日一冊は読んでいましたが、最近では、そういうわけにいかなくなりました。

春榮　私も少し読みますが、主人ほどではないです。

康彦　家内は好気心旺盛で、いろいろなことに手を出すんです。今までも、生け花、ダンス、書道など、だいたい二～三年で新しいことを始めます。今は三味線と水泳をやっているようです。

春榮　三年ほど前から、スイミング・スクールに通っています。クラスの女性の中では、一番年上なんですが、まだまだ続けるつもりです。新しいことを覚えたり、できるようになるのはとても楽しいです。

――では最後に、ご家族に一言。

康彦・春榮　好きなことをさせてもらって、とても感謝しています。

家族に聞きました

「どんな おじいちゃん、おばあちゃん ですか？」

仁之（まさゆき）さん（長男・49歳）

父は、戦後の家長制が崩壊して、父親というものの価値感が変化する中で、私たちを育ててきましたから大変だったろうと思います。

母は、尺貫法がメートル法になったとき、すぐにメートルで裁縫をしていましたから、すてきな母親ですよね。

奈緒子さん（孫・16歳）

とにかく元気。ハワイでは、私たち二人が疲れてホテルで休んでいるときに、一人で出かけたりしていました。それに、外人に平気で声をかけたり、ホテルの部屋の電話が鳴るとまっ先に受話器を取ったり…。

「若い」の一言です。

恵子さん（長男の妻・43歳）

二人ともとてもバイタリティがありますし、本当にいろいろなことを知っています。孫の英語の教科書をもらって読んだりして、生きることに挑戦しているような感じがします。とても尊敬してますし、二人のように年をとっていけたらいいなと思っています。